

アメリカ滞在記 ⑨
イエローストーン国立公園
霧野萬地郎

▼イエローストーンは1872年に世界初の国立公園に指定された。その域はアイダホ、モンタナ、ワイオミングの州にわたる。標高は約2500m程で、3000m級の山々に囲まれる火山地帯でもある。

自然保護を徹底する為に、手つかずの地域は多く、観光できる場所は限られ、また、宿の予約なしで公園内に入る事は出来ない。電柱は無く、自家発電による灯りだけだ。訪ねた1987年当時はロッジには電話も無い。ここでは自然を守ることが主で、人はあくまでもその範囲内の傍観者である。それだからこそ人の手を極力避け、大自然がそのままの地域なのだ。数年前にジャックと釣りをしたミズリー川の最上流の景観と、未だ活動中の火山活動を、今回は家族と一緒に体感した。公園内へは東西南北の四か所の入口がある。我々はイエローストーン空港からレンタカーで10分ほどの西口から入った。

針葉樹林を抜ける辺りから、噴泉の湯気があちこちに昇っている。駐車して公園内に入れば、湿原の様な熱泉池には、木道が設えられてあり、噴き出した硫黄が固まった奇岩が露出している。注意板があつて、「木道から外れるな！硬そうに見えても表層は薄く、強い酸性で、道を外し火傷で死んだ人は多い。噴出場所は日々変わる。」と記され、正に地獄めぐりの様相だ。勿論、この地獄の湿原には動物も植物も無く湯煙が動くだけだ。

木道から離れても、至る所で間欠泉が見える。その中に約90分毎に噴きあがる間欠泉があり、その名は「古き忠実な噴泉」云う。時間通り忠実に噴き上げる事からこの名前が付いたと云う。都度、数万リットルの熱湯が30〜50mの高さで数分間にわたって噴き出す。時間が近づくとその周りには人が集まり始



時間忠実な間欠泉

め大噴出を待っている。ぶつぶつと吹き出す予兆から一気に温泉が空へ噴き上がる迫力は見事という他は無い。

涼しくも地下にマグマの鼓動かな

大空へ噴泉熱き虹呼びべり

▼翌朝は車で峡谷を巡る。

イエローストーン国立公園の中央部に大きな渓谷がある。ジャック



峡谷と滝が続く景観

と川釣りをした、あのミズリー川の更に上流だ。その急峻な山間に約32キロメートルにわたって浸食された絶壁の黄色い地肌が続く。イエローストーンの名前は、この渓谷の色から名づけられた。この渓谷に流れ込む滝が落差が94m、この少し上流に落差33mの滝が二段続き、険しい峪を轟音を立て激流を成している。すぐ近くの展望台から滝を間近

に見てその美観と迫力ある轟音を堪能した。

公園内にはアメリカ大陸の分水嶺がある。このイエローストーン川がミズリー川へ注ぎ、やがて、ミシシッピ河となってメキシコ湾へ注ぐ。スネーク・リバーは、コロンビア川にそそぎ、そして太平洋に至る。ここは北米大陸の屋根になるロッキー山脈なのだ。

イエローストーンの生き物は夫々の環境の中で逞しく生きている。熱泉に耐える藻類、そして、ぬるま湯には鱒もいるらしい。冬でも氷結しない温泉湖で四季を通して過ごす白鳥もいる。ツンドラ地帯ではビッグホーン(大角ヒツジ)が岩場に生息する。アイダホ州境を越えて低地になれば、針葉樹林や草原には、ムース、バイソンなど北米固有の生物が現れて来る。



身近なバイソン

ここでは、彼ら自然動物に対しては、「餌を与えない」「柵で囲わない」「駆り立てない」「狩猟は厳禁」と決められている。それに慣

れた動物たちは安心して無防備で人前に姿をみせる。彼らが気を付けるのは、熊やクガーに捕食される事だけなのだ。

それらの動物たちと出会う度に車を停めて、ゆつくりと眺めた。注意する事は熊だけだ。時には観光客の捨てた生ゴミを目当てに道路沿いにも出没するらしいが、見る事は無かった。アフリカのサファリとは違って、穏やかな自然公園だ。

夏霧やバイソン突と猛ダッシュ

草を食むヘラジカの目の涼しかり

▼更にワイオミング州へ入りグランドテトン国立公園へ入る。ロッキー山脈の一翼を担うテトン山脈はごつごつした鋭い岩肌の山々が天を突く。山脈の標高は3000mほどで、このグランドテトン山



グランドテトンにて

のピークだけが4000m近い。データ的にはそれだけのだが、ジャクソン湖から垂直にそそり立ち、その山塊を水面に写す絵になるような美景だった。この湖を時にはムースが走り、ビーバーの浮巢もあり、閑静な中にも生き物たちの息遣いが感じられる。

ビーバーは留守や浮き巣は無音界

秋近し湖面と山の虚と実と

更に南下してジャクソンホール市に至る。町の広場にエルクの角が山と積まれてオブリジェとして置かれている。抜け替わるエルクの角を集めて作るのだ、この為にエルクを殺す事は無いと云う。ワイルドな西部の雰囲気を作っているのだ。ここで、簡単なファストフードで腹を満たし、空港でレンタカーを返却してひと夏の家族旅行は終わった。

緑陰やハンバーガーを子ら嬉々と

続く